

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Preface

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2099

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



まえがき：セミナー活動報告

金子 百合子

スラヴ諸語の体／アスペクトは文法研究の中でもとりわけ活発に議論されてきた分野のひとつであるが、その充実した研究史の割には、研究者のほぼ一致する見解が比較的少ない点でも際立つ。このことは1995-96年に世界のアスペクト研究者を対象に実施された体／アスペクトに関するアンケートに詳しい¹。スラヴ諸語の体が、その概念の理解と運用の両面において、スラヴ諸語を母語とする話者にとっても解釈に頭を悩ませる問題であるのに、いわんや系統的に遠く離れた日本語の話者である私たちにとってはその言語的現れを理解するハードルは非常に高い。ロシア語（スラヴ諸語を便宜的に代表させる）の完了体と不完了体の使い分けの難しさは、日本語の「は」と「が」の使い分けの難しさに似るかもしれない。いずれにせよ、世界のアスペクト研究はロシア語の体の研究がもたらした学術的知見を取り込んで発展してきた一面がある。日本では、日本語のアスペクト研究のひとつの流れを作り出した。

セミナー開催に至った経緯

体／アスペクト研究は決して古い研究分野とは言えないながら、これまでに蓄積された先行研究は膨大な数に上る。最近では、トピックを限定しての綿密な研究も多く、アプローチ法も研究者の立場によって実に多様である。そこにアスペクト研究では悪名高い「術語論争」も加わると、先行文献の精査だけでも相当の時間を要する。もう一度、改めて“ビッグピクチャー”を把握したいという欲求は大きくなるばかりである。ロシア語話者でもあ

¹ Ответы на вопросы аспектологической анкеты филологического факультета МГУ («Москву университет文学部アスペクト研究アンケート設問への回答») // М.Ю. Черткова (отв. ред.).

Труды аспектологического семинара филологического факультета МГУ им. М.В. Ломоносова. Т.2. М.: Изд-во Московского университета, 1997. С. 140-233 ; 前掲論文の概要は以下 —

М.Ю. Черткова, В.А. Плунгян, А.А. Рябчиков, Д.О. Кузнецов. Ответы на анкету

аспектологического семинара филологического факультета МГУ им. М.В. Ломоносова //

Вопросы языкознания. No. 3. 1997. С.125-135 (金子百合子 (訳) 「モスクワ大学文学部アスペクトセミナーアンケートへの回答 (『言語学の諸問題』1997, No.3)」 『欧米言語文化論集Ⅱ』, 岩手大学人文社会科学部国際文化課程欧米言語文化コース, P. 41-59, 2015) .

る研究者がロシア語（スラヴ語）の体の特徴をどのように捉えているか、そして他言語との比較においてどのようなアプローチ法を採用し、どのような成果を挙げているか、体／アスペクト研究がとりわけスラヴ語圏で今日どのような展開を見せているか、といった点を直接学ぶ機会があれば・・・、と筆者が夢想しはじめたのが 2013 年、今から二年前の話である。

なぜ、2 年か。それは 2013 年 6 月にスウェーデンのヨーテボリ大学で国際スラヴィスト会議アスペクト研究部会が主催する第 4 回国際アスペクト会議が開催され、そこで次の 2015 年第 5 回会議の開催地が京都に決定したからである（京都産業大学 2016 年 11 月 12～15 日）。国際会議の準備の期間は瞬く間に過ぎ、その間ウクライナ問題、ロシアに対する経済制裁、ルーブルの下落という、京都会議の開催さへ危ぶまれる時期を乗り越え、世界中より錚々たるアスペクト研究者が来日することになった。この幸運な機会を利用し、国際会議終了後に神戸市外国語大学を会場に小規模な国際アスペクトセミナーを企画するという夢はついに具体的な形を取り始めた。

当セミナーに関しては東京外国語大学を拠点に活動するロシア語研究会「木二会」と相談し、当会のメンバーからなる組織委員会を作り、具体的な計画を詰めていった。セミナーの目的は、アスペクト研究の各分野の指導的立場にある研究者から、現在のスラヴ・アスペクト研究の動向、アスペクトと関連した理論的、類型学的、対照言語学的諸問題の在り処を、最新の研究成果も交えて、日本の言語学領域の研究者とりわけ若手研究者や院生に分かりやすく講義してもらい、それによってアスペクト研究における着眼点と多様なアプローチ法について見識を深めることに置いた。尚、本報告書における講師の講演内容の和訳も木二会メンバーによるものである。

セミナー開催

そうして 2015 年 11 月 16（月）ついに、ロシア語研究会「木二会」主催、神戸市外国語大学共催、日本ロシア文学会協賛のもと、国際セミナー「現代スラヴ・アスペクト研究の動向」は本学の三木記念会館を会場に幕を開けた。

当日のプログラムについて簡単に述べる。

まず、主催団体の「木二会」を代表して、東京外国語大学名誉教授の中澤英彦氏より開会の挨拶を頂き、次に神戸市外国語大学の船山仲他学長より開催校の挨拶を頂いた。

目玉のセミナーはセクションを三部に分けて行った。各セクションは司会者役の講師による、テーマ導入を兼ねた研究史概略や主要な着眼点の整理といった一般的な傾向性をもつ講義の後、具体的な問題により深く切り

込む形で別の講師による基調講演があり、その後、パネリストを中心にした質疑応答という流れで進められた。

「世界の言語とアスペクト」と名付けられたセッションⅠでは、ロシアを代表する類型論研究者であるヴィクトル・フラコフスキー氏（ロシア科学アカデミー言語学研究所・研究室長）に類型論的見地より現在のアスペクト研究の課題を論じて頂いた。課題のひとつが地球上のあらゆる言語に存在するアスペクト意味の記述を可能にする“普遍的な文法意味セット”の構築であったが、続いて登壇されたウラジーミル・プルンギャン氏（ロシア科学アカデミーロシア語研究所・副所長）はまさに言語横断的な「普遍的な文法項目目録 Universal Grammatical Inventory」と「普遍的意味項目目録 Universal Semantic Inventory」の作成に精力的に取り組んでおられる。講演ではそのような目録の言語類型学的意義とそのロシア語（スラヴ語）のアスペクト意味体系への適用の場合について講義をして頂いた。

セッションⅡは「動詞の語彙的アスペクト」をテーマとする。ここでは動詞の語彙的アスペクトと呼ばれる動詞のアクションリティがテーマとなった。スペイン語とロシア語の対照言語学研究を進めるエレナ・ゴルボヴァ氏（サンクトペテルブルク国立大学文学部一般言語学科・教授）から、動詞語彙のアクションリティの研究史を講義頂いた。その後、アクションリティの類型論を専門とするセルゲイ・タテヴォーソフ氏（ロモノーソフ名称モスクワ国立大学文学部理論応用言語学科・教授）より、部分理論や事象意味論などの理論的枠組みから動詞叙述における事象構造にアプローチして頂いた。

そして最後のセッションⅢは「スラヴ語の体／アスペクト」である。セッションの口火を切って下さったエレナ・パドゥチェヴァ氏（ロシア科学アカデミー全ロシア科学技術情報研究所・主席研究員）はロシア語（スラヴ語）のアスペクト体系の一つの特徴である「体ペア」について「マースロフ基準」の有効性を改めて述べるとともに、完了体のカテゴリカルな意味が「回顧的視点」にあることを指摘された。続いて、登壇したエレナ・ペトルーヒナ氏（ロモノーソフ名称モスクワ国立大学文学部ロシア語学科・教授）は、スラヴ諸語間に見られるアスペクト体系の性格における相似点と、具体的用法における相違点を特にチェコ語を中心に鮮やかに示された。

各セッションで取り上げられたテーマはいずれも、言語におけるアスペクト・カテゴリーの本質を探り理解を深めるためには避けては通れない、アスペクト研究の根幹を成す主要テーマである。同時に、これまで多く語られていながらも、未だ意見の相違の方が一致する見解よりも多いテーマで

ある。講演の後は、様々な視点から議論を深めてもらうため、パネリストから講師へ質問を投げかけて頂いた。パネリストのお名前を名字のアルファベット順に挙げる。アドリアン・バレンツェン氏（アムステルダム大学、オランダ）、ロザンナ・ベナッキオ氏（パドヴァ大学、イタリア）、ハンス＝ロバート・メーリッグ氏（キール大学、ドイツ）、ハンヌ・トモラ氏（タンペレ大学、フィンランド）、ナデジュダ・ゾリヒナ＝ニルソン氏（ストックホルム大学、スウェーデン）である。いずれのパネリストの方もまた、多様な観点から体／アスペクトの問題に取り組んでおられる、ヨーロッパを代表する研究者陣である。パネリストからの鋭い質問は、講演内容に関する確認点や補足、あるいは講師の理論的枠組みにおける具体例の解釈などに関するもので、議論は白熱した。聴衆の中には京都の国際会議からそのまま神戸まで来られ、それこそ関空からの帰国便に間に合うぎりぎりまでセミナー（あるいはその後の懇親会）に参加された海外の研究者もいらっしやった。彼らもまた、京都での国際会議の場さながらに、質疑応答を盛り上げて下さった。

時間的な制約もある中、心ゆくまで議論し続けるわけにもいかず、セミナーは神戸市外国語大学副学長でもあるロシア学科教授の岡本崇男氏より閉会の挨拶を頂くことで、興奮冷めやらぬうちに幕を閉じた。

上述のことから、どれだけ贅沢なセミナーであったかが伺えるであろう。まさに千載一遇の機会であった。発表者（講演者、パネリスト）と聴衆を合わせて、セミナー参加者は54名（12カ国）を数える。平日の月曜日にも関わらず、遠くから日本のロシア語研究者の方々も参集下さった。関西を中心に参加して下さいた多くの大学院生、学部生にとっては、理解の容易い講演ではなかったかもしれないが、議論の中でアスペクト研究における問題の在り処が鮮明になり、対立する主張の根拠を確認できたことは、彼らにとって大きな学びの場であったと同時に、研究者たちの熱気あふれる学問的議論の場に立ち会う機会を持てたことは幸運なことであった。

多くの方々のご協力とご好意がなければ、このセミナーを成功させることは叶わなかった。感謝の気持ちを一言では到底言い表せないので、謝辞は本書の最後に改めて申し上げさせていただく。